広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	シュタイナー教育思想の哲学的基盤(4)：「精神」と「自由」の獲得に向けたヘーゲルの認識論（前半）
Author(s)	衛藤，吉則
Citation	HABITUS , 20 : 17 - 30
Issue Date	2016-03-18
DOI	
Self DOI	10.15027/39833
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039833
Right	
Relation	

シュタイナー教育思想の哲学的基盤(4)

―「精神」と「自由」の獲得に向けたヘーゲルの認識論(前半)

衛　藤　吉　則

(広島大学准教授)

【論文構成】

第一章　シュタイナーによる認識論的格闘

―ヘーゲル以前：カント、ゲーテ、E.ハルトマン、フィヒテ

第二章　「ゲーテ的世界観」「汝自身を知れ」の哲学者としてのヘーゲル

第一節　「ゲーテ的世界観」の哲学者としてのヘーゲル

第二節　「汝自身を知れ」の哲学者としてのヘーゲル　　(本号はここまで)

第三章　シュタイナーによるヘーゲル認識論の理解　　(次号はここから)

第四章　ヘーゲル的立場との相違点

第一章　シュタイナーによる認識論的格闘―ヘーゲル以前：カント、ゲーテ、E.ハルトマン、フィヒテ

ここでは、シュタイナーによるヘーゲル哲学の理解に先立ち、そこに至るまでのかれの認識論的格闘の過程を略述したい[1)]。

若きシュタイナーは、自らの体験に起因する「可視の事実」と「不可視の本質」との総合という認識衝動から、理性の射程を人間認識のぎりぎりのところまで追求しようとした近代認識論の創始者カントの哲学に取り組んだ。しかし、カントの認識論に人間認識の拡張的な可能性を期待したシュタイナーではあるが、かれはそこに「ある前提」が立てられていることに失望することなる。そ

れは、「いっさいの経験に依存しない(ア・プリオリな)普遍的な知識が事実として存在している」というカントの認識前提であった。こうした設定に対して、シュタイナーは、カントが認識を考える際に、〈形而上学Metaphysikの生き残り〉を事前に想定したため、物質を超えた(metaphisisch)ア・プリオリ(超経験的)な総合的な認識こそが、その崇高な領域に近づき得るものとし、「物自体」という虚構の概念や数学のア・プリオリ性を規定してしまった、と批判する。シュタイナーの場合、偏見なく認識の生起プロセスをみるとき(これが「無前提の認識論」の意義となる)、カントの見解とは異なり、いかなる知識対象もいったん直接的で個別の体験としてわたしたちに迫ってくる、つまり、経験となると考えられた。それゆえ、シュタイナーは、こうした認識前提を誤りとし、それを土台とするカントの認識論は「砂上の楼閣」であると評した。カントにおける〈一般的経験/超経験〉〈一般的感覚/超感覚〉の分断は、シュタイナーにおいては〈個別の感覚・経験の質的変容〉の問題とされ、けっして認識論の前提とされるべき規定とは解されなかった。したがって、カント的認識論は、シュタイナーにとって、主観の存在論的変容を考慮せず、素朴実在的な主観主義にとどまり、現実(感覚世界)と理念(超感覚的世界)とを分断した意味で克服すべき理論と考えられたのである。

こうした分断を架橋する試みは、ひきつづきゲーテ的認識論の研究へと向けられた。シュタイナーは、このゲーテ思想との出会いを通して、懸案であった感覚世界と理念世界とを総合する鍵を見いだす。ゲーテ的認識に特徴であったのは、認識の源泉をひとつにみることであり、それが「理念世界の浸透した経験」なのであった。それは、外から与えられる直観ではなく、現実の徹底した観察を基盤とする〈拡張的な感覚経験〉といえる理念認識の経験であった。このような「理念世界の浸透した経験」という高次の認識体験において、知覚内容と概念は〈素朴的な次元〉を超え、主観と客観は高みにおいて総合されると

考えられたのであった。

さらに、シュタイナーは、この認識を通してなされる有効な判断と理念形式を対象別に規定する。「無機的自然」に対しては、偏見のない徹底した観察・比較・分析・総合による「証明的反省的判断力(beweisende reflektierende Urteilskraft)」を通して、「根源現象(Urphänomen)」としての自然法則が見いだされ、「有機的自然」については、思考しつつ観照し(denkend anschauen)、観照しつつ思考する(anschauend denken)なかで、その複雑な有機的変容(Metamorphose)のうちに「原型(Urtypus)」を見いだす「観照的判断力(anschauende Urteilskraft)」が不可欠となる、と考えられた。このような見方こそが「自然認識の最高の形式」であり、それがゲーテの一元的認識と解されたのである。有機体の認識について、カントが、有機体が個物(特殊)の中に合目的性(普遍)をもつため存在論的には証明されず、その本質言明は実践的な課題であるとしたのに対し、シュタイナーとゲーテは、ここで示したように、メタモルフォーゼの生成的発展と「原型」のうちに有機体の「特殊」と「普遍」の生き生きとした図式をみるのである。

しかし、シュタイナーはゲーテ的認識についても限界を指摘することになる。シュタイナーによれば、ゲーテは、「人間は自分自身を知るかぎりにおいて世界を知りうる(汝自身を知れ)」という立場を徹底できなかったため、独自の存在である人間自身の精神については理論を展開できなかったとされる。そして、シュタイナーは、ゲーテが踏み込むことのできなかった自己認識を担う「思考」のうちにこそ「最高のメタモルフォーゼ」があると考えたのであった。この人間精神に向けられた学問こそが、かれのいう「精神科学」となる。この自己認識としての「思考体験」について、シュタイナーは、「思考における対象化(外的世界観察に限定されたゲーテ的な対象意識)」という作用において自己を事物と向き合う個体にし、「自己意識を思考する(対象意識への気づき)」という作用において自己を客観と結びつけるとし、そうした所与と内観のあくなき循

環作用によって、通常の感覚的次元においては見いだし得なかった真理が明らかになり、外的な観察に基づく似像としての不完全な知覚像が完全なる精神的知覚世界の思考原像と結びつけられていく、とその意義を語る。

以上のように、ゲーテの認識論は、総合の鍵としての「主体変容(メタモルフォーゼ)論」を示し得たが、シュタイナーが自らの理論の核になるべきであると考えた「精神のメタモルフォーゼ」の理念を哲学的に解説するには至らなかった。精神のメタモルフォーゼの理論化には、「可視の事実領域」と「不可視の本質領域」とを主体の側で架橋していくあらたな哲学的見方を手に入れる必要があった。

その手がかりを、シュタイナーは、つぎに、ショーペンハウワーの「生の意志」を、ヘーゲル哲学や無意識の哲学を基盤に再解釈し、カント的な認識の二元論を克服しようとしたE.ハルトマンの認識論哲学にみていくことになる。E.ハルトマンは、シュタイナーが、最初の哲学的著作『真理と科学』(1892)において、「尊敬の念を込めてこの本を捧げる」と冒頭で名前を明記し、つづく『自由の哲学』(1984)ではカント的認識論の克服をめざした人物としてどの哲学者よりも多く引用した人物である。シュタイナーは、非論理的なものと論理的なもの、感覚界と叡智界、意志と表象を、無意識の働きをも考慮して統合的に構造化しようとしたハルトマンの認識論的観点に注目することになる。

ハルトマンは、カントと異なり、「物自体」と「表象」は間接的ではあるが、意識の内奥に潜む無時間的な「絶対的無意識」としての「宇宙的な意志」を通じてかかわることができると考えた。しかし同時に、ハルトマンは、こうした意志作用を受けて見いだされた知覚内容を一般的な感覚経験の範囲内で規定することで、客観性が保持され得るとも考えた。それゆえ、ハルトマンにおける認識論の構造は、無意識的な表象として本質にかかわる〈持続性〉と、それとは別に感覚によって制限された意識内容として表象される〈断続性〉とをあわ

せもつこととなる(そのような自己の立場をハルトマンは「超越論的実在論」と称した)。

しかし、こうした構図は、シュタイナーにとって理解しがたいものとされた。つまり、そこでは、意志を介して主客を融合するとされる「たったひとつの知覚内容」(持続性)と、現実の認識において制約された形で現れる「相対的な知識内容」(断続性)とが、カントの場合のように分断された形で並立的に想定されているからである(シュタイナーはこのハルトマンの立場を「形而上学的実在論」と批判を込めて称する)。

よってハルトマンの見解は、シュタイナーにとって、認識主体の〈動的質的〉な存在論的変容を視野に入れておらず、最終的には、「素朴実在論と観念論との矛盾に満ちた混合」の域を出るものではない、と結論づけられるのである。感性・経験世界と理念とをつなぐものとしてシュタイナーが構想する「思考内容の一元論」のパラダイムと方法に関する探究は、さらに意識の重層的で可動的な構造を説明するフィヒテの認識論へと向けられることになる。

フィヒテは、シュタイナーが博士論文の主題とした哲学者であり、「学一般の学」としての哲学を基礎づけるものとして「知識学」について自我論を軸に構築しようとした人物として知られる。かれの自我論では、「絶対知」としての理性はカントのように二元的に分断されることなく、認識は自我の変容を通して一元的に高進可能なものと考えられた。シュタイナーは、こうしたフィヒテの自我論のうちに、ゲーテが踏み込むことのできなかった〈内観的アプローチ〉やハルトマンがカント的認識論を架橋する視点として保持できなかった〈意識の可動性=自己意識の展開〉についての見方を期待した。

とりわけ、シュタイナーが注目したのはフィヒテが自我論構築の際に採用する人間認識の二つの探究方法とそれがもたらす帰結であった。そのひとつは、根源的に意識から生じてくるもの以外を排除し自我の純粋概念を取り出す方法

であり、いまひとつは、自己自身を観察することで自我の本性を見極めようとする方法である。

まず、フィヒテは、前者の、自我の純粋概念を取り出す試みを通して、「自我は根源的に端的におのれの存在を定立する」(実在性)という第一原則、さらに、「自我に対して端的に非我が反定立する」(否定性)という第二の原則、そして「自我は自我の内で、可分的自我に対して可分的非我を反定立する」(制限性:[理論的自我] と制限された自我による非我の限定・定立 [実践的自我])とする第三原則を見いだし、これらのプロセスを通して、カント的分断を自我の変容という次元で総合的に架橋していこうと考えた。つぎに、後者の自己観察の方法とは、かの、「あなた自身に注意を向けなさい。あなたの目を、あなたを取り囲むすべてのものから転じて、あなたの内部に向けなさい」というメタ認識的な自己内観的アプローチをさし、フィヒテはそこに一般的な経験的明証性とは異なる内観的な洞察を通した〈確からしさ〉を追求することになる。

以上の二つの探究方法、「自我意識の構造理解」と「自己内観(あなた自身に注意を向けなさい)」を通して、フィヒテは、自我の根底に端的で無制約的な「存在(Sein)」である「絶対的自我(純粋自我)」を措定した。そして、それを基底に、総合を可能とする「構想力」の力を得て、自我は非我の定立とその克服を繰り返し、知的直観としての自我(主客未分的自我)から個的自我(主客分化的自我)を経て、理念としての自我(主客合一的自我)へ、別言すれば、「理論的自我」を超えて「実践的自我」へと向かう道筋を示した。

しかし、こうしたフィヒテによる自我論の構造に対して、シュタイナーは、「理論的自我」の射程とその受動的性質に対して疑義を呈する。フィヒテは、「理論的自我」に、根源的な自我の能動性と、非我による限定の結果生じる自我の反省的能動性をみるが、その一方で、理論的自我は意識の先鋭化の果てに、「己の能動性の対象の中で自己を見失う」と述べるように、自我の「能動性の喪失」

と「受動性」をも容認する。そして、その先に、「構想力」は再び神的な知的直観の力を外から得て「実践的自我」による総合を実現していくと考えられた。こうしたフィヒテによる「理論的自我」から「実践的自我」への変転は、シュタイナーにとって、わたしたちの個人性が消失し、理念としての自我である実践的自我が個人性を超えて機能しはじめることを意味した。しかも、このような物の見方は、自我の「存在定立」のみが〈無制約〉的であり、自我から出発するところの他のすべてのものは〈制約〉される、という「自我作用の分裂」と、「無制約的なものから制約されたものへと到る飛躍」を示すものとしてシュタイナーによって批判された。シュタイナーは、〈認識する自我〉という立場に立つ場合、自我は、自らの存在の「事実(Tat)」と自らによる定立の「行為(Handlung)」との統合性ならびに即応性を意味する「事行」の状態として静止しているのではなく、事行を遂行し、絶対的な決意とかかわり、能動性を発揮すべきである、と指摘する。そして、〈認識する自我〉が「即かつ対自的な能動性」を身につけることによって、自己についてと同時に、非我に関しても根源的定立が可能となると主張するのである。

それゆえ、こうした知的直観という神的至上命令を通して自己に外から要請するフィヒテによる知の体系は、最終的にはカント同様、問題を認識とは別の領域に持ち込むことになった、とシュタイナーによって否定されるのである。シュタイナーは、ひきつづき、自我が思考の形式をもって所与に歩み寄る場合にのみ、現実的な内容に達することができる、とする自らの構想をヘーゲル哲学のうちに模索していくことになる。

第二章　「ゲーテ的世界観」「汝自身を知れ」の哲学者としてのヘーゲル

第一節　「ゲーテ的世界観」の哲学者としてのヘーゲル

カント以降の観念論哲学において、ヘーゲル哲学は、ゲーテにみる〈メタモ

ルフォーゼ(変態)の考え方〉を理念において表そうとした点で「ゲーテ的世界観の哲学者」であると、シュタイナーによってひときわ高く評価される。では、〈理念世界の浸透した経験世界〉という認識源泉に基づいてダイナミックなメタモルフォーゼを構想するゲーテ的認識論と、ヘーゲルの理論は、シュタイナーによっていかに重なりをもってみられるのだろうか。

シュタイナーは、哲学の目的を、世界(自然)と人間とのかかわりや、世界における人間(個人)の生の意義・使命を理解することにあると考えている。このことについて、かれは、ヘーゲルの『自然哲学(Naturphilosophie)』の結語をあげ、それがゲーテの言葉の哲学的弁明に相当する、と述べている。

「生きているものにおいて、自然は、より高次のものに変わることによって、自らを完成させ、平安を得る。精神は、かくして自然から生じた。自然の目的は、こうした外的なあり方から精神としてみずみずしく現れ出るために、自らを滅し、直接的なもの、感覚的なものの殻を突き破り、不死鳥としてわが身を焼きつくすことである。自然は、自らを再び理念として認識し、自己と和するために、自らを別のものに変容させる。…自然の目的として、精神は、まさにそれゆえに、自然以前に存在しているのであり、自然はそこから現れ出たのである」(傍点は筆者による)[2)]。

こうした物の見方において、ゲーテとヘーゲルは互いに完全に一致していると、シュタイナーはみる。

しかし、前章で確認したように、シュタイナーは、ゲーテ論との相違点をも明示している。かれは、ゲーテがこのメタモルフォーゼの見方を自然に限定し、人間精神に適用できなかった点に思想上の限界をみる。そして、かれは、ゲーテが踏み込むことのなかった自己認識(汝自身を知れ)を担う「思考」のうちにこそ、「最高のメタモルフォーゼ」があると考え、その原理を、人間精神を含めた全宇宙(der ganze Kosmos)に適用するヘーゲルに共感を示していくことに

なるのである。

第二節 「汝自身を知れ」の哲学者としてのヘーゲル

(1)ヘーゲルにみる「汝自身を知れ」

シュタイナーは、ヘーゲルを、「汝自身を知れ」の道を歩む哲学者として位置づけている。このことは、ヘーゲル著『哲学史講義(*Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie*)』(1833)における新プラトン主義哲学に関する記述へのシュタイナーの註解によっても裏づけられる[3)]。シュタイナー自身、『近代の精神生活のはじまりにおける神秘主義と現代の世界観との関係(*Die Mystik im Aufgange des neuzeitlichen Geisteslebens und ihr Verhältnis zur modernen Weltanschauung*)』(1901)において、このヘーゲルによる『哲学史講義』のつぎの一節を引用している。

「部屋で哲学者たちを口論させれば、そのような口論は言葉の抽象化にすぎない、と人々はいう。そうではない。それは世界精神の行為(Taten des Weltgeistes)であり、それゆえ、運命の行為であるのだ。哲学者たちは精神のかけらで身を養っている者たちよりも、主なる神の近くにいる。哲学者たちは神の勅令を原文で読み、ともに書く。哲学者たちは聖所(Helogtum)の内陣に入った秘儀参入者(die Mysten)なのである」[4)]。

まさにこの言葉でもって、ヘーゲルが自ら、古代以来の密儀的な道を歩み、古代の叡智を体験した、とシュタイナーは示唆するのである。

具体的には、シュタイナーが解する、このヘーゲルの密儀の道は、フィヒテ的な二元論に分化する物の見方ではなく、自由や倫理を含む理念を自我の運動軸で連続的につなぐ試みとして表される。それは、ソクラテスが「善き生」に

向けてめざした「内へ、そして上へ」と飛翔する「魂の翼」による認識・道徳の総合運動(つまり「汝自身を知れ」の道)として哲学的に体系づけられる。そのことを、シュタイナーは、ヘーゲルの『エンチクロペディー(*Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften*)』(1817/1827/1830)に記される以下の言葉を援用して解説している。

「外界に横たえられた道徳的な直観世界(Anschauungswelt)から徐々に身を引き離す努力をし、自らの内部へと突き進む。人間は自己を、自らの倫理性の源泉でもあるところの、自己の内部に作用を及ぼしている原初存在の観点にまで高める。人間はもはや外界ではなく自らの心魂の内に、その道徳的命令(Sittengebote)を求める。人間は自己を、自らのみに依拠させるのである。それゆえ、この独立性、この自由は初めから人間に帰属するものではなく、歴史的発展過程において自力で獲得されるものである」[5)]。

では、つづいてシュタイナーによるヘーゲル認識論の構造理解を描出していくが、それに先立ち、シュタイナー自身における「汝自身を知れ」の哲学の意義についておさえておきたい。

(2)シュタイナーにみる「汝自身を知れ」

「汝自身を知れ」とは、周知のように、直接には、デルフォイの神殿に刻まれていた箴言「汝自身を知れ(γνῶθι seαυτόν (gnothi seauton)」をさす。シュタイナーは、この古代の神託の叡智が、「心像－表象(Bildervorstellen)から思考による世界の秘密の把握へと進む、世界観の発展へ向けての促しを含んでいる」、と語っている[6)]。実際、シュタイナーによる認識論の考察過程をたどるならば、この象徴的な「汝自身を知れ」の理念を、哲学的に今日的な意味において再構

築しようとする意図が感じられる。シュタイナーは、その理念の現実化の意義をつぎのように語る。

「諸々の世界の謎と人生の問題を解くべく、これまで人間の精神的営為において成就されてきたものをたどっていくならば、観想する心魂(betrachtende Seele)に、「汝自身を知れ(*Erkenne dich selbst*)」という言葉が再三再四浮かんでくる。人間の心魂(Seele)がこの言葉を思い浮かべることによってある一定の作用を感じとることに、世界観に関する理解はかかっている。…わたしは「汝自身を知れ」という課題にその根本的性格が表現されている世界との関係を、自らの内部に発展させるときにはじめて本当の意味で十全な人間(*ganz Mensch*)になる、と思わざるを得ない」[7)]。

「汝自身を知れ」の哲学、それは、自らの思考を、外なる対象にではなく、直接自己自身の内面に向け観照する哲学的営為をさす。それは、ある意味、自己の内観を通した、普遍と特殊の即なる知的感応体験が是認される世界観でもある。シュタイナーは、自己認識の特質をつぎのように語っている。

「自己認識において、彼ら(高い精神性を獲得しようとする者;筆者註)に新しい感覚が開かれている。自己認識のなかにほかの認識と異なったものを見ない人には存在しない光景を、この感覚は見せてくれる。…ほかの認識において対象は外界にあり、自己認識においては自らの心魂が対象となる」[8)]。

つまり、こうした認識においては、まさに心魂の問題がかかわりをもつことになる。すなわち、この見方では、普遍との静的な知的感応の事実を語ることが問題なのではなく、自己の心魂の深化とそれに基づく真理の見通しが〈個と

普遍の即応関係〉のもとで問題となるのである。したがって、このような認識の図式では、「人はより善くなる」という動的な人格の上昇的発達が前提とされていることを理解しなければならない。ここでは、「より善くなる」程度に応じて、リアリティへの感応の度合いが増すものと考えられる。そして、このような認識(知)と人格(徳)の変容を、根源においてもっとも創造的に促す「思考」について、シュタイナーはつぎのように解説するのである。

「人間は、そのまなざしを自然に向けるとき、自然の諸現象を人間に理解可能なものにする思考を最後に見いだすように、自己自身の深みで内省(Einkehr)をするとき、そこにも最終的に思考を見いだす。…それゆえ、思考は、人間の自我意識のなかに自らを見るのである」[9)]。

以上が、「汝自身を知れ」についてのシュタイナーの理解となる。

次号では、シュタイナーによって、そうした「思考」を核とした「汝自身を知れ」の認識を哲学的に体系化したとみなされるヘーゲルの哲学について、シュタイナーの理解を通してみていく予定である。

【凡例】

シュタイナーの著作からの引用は、シュタイナー全集単行版(Rudolf Steiner Gesamtausgabe)をGA、シュタイナー全集文庫版(Rudolf Steiner Taschenbücher aus dem Gesamtwerk)を Tbの略号で示し、そのあとに文献番号を用いて出典を示すこととする。

GA…Rudolf Steiner Gesamtausgabe,1956～. Rudolf Steiner Verlag, Herausgegeben von der Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung, Dornach/Schweiz.

Tb…Rudolf Steiner Taschenbücher aus dem Gesamtwerk, 1961～. Herausgegeben von der Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung, Dornach/Schweiz.

GA18 (Tb610) : Die Rätsel der Philosophie in ihrer Geschichte als Umriss dargestellt, Dornach 1985 [1914] .(山田明紀訳『哲学の謎』水声社、2004年)
GA7(Tb623) : Die Mystik im Aufgange des neuzeitlichen Geisteslebens und ihr Verhältnis zur modernen Weltanschauung, Dornach 1993 [1901] . (『新たな時代の精神生活における黎明期の神秘主義と現代的世界観とその関係』)

註

1) シュタイナーのカント理解については拙論「シュタイナー教育思想の哲学的基盤(1)-「哲学的考察の原点」としてのカント的認識論」『HABITUS』(第17巻、2014年)ならびに拙論「シュタイナー教育思想の哲学的基盤(2)-「哲学的考察の原点」としてのカント的認識論」『HABITUS』(第18巻、2015年) を、シュタイナーによるゲーテとハルトマンの理解については拙論「シュタイナー教育思想の哲学的基盤-ゲーテとE.ハルトマンの認識論」『倫理学研究』(第24号、2014年)を、また、シュタイナーのフィヒテ理解については拙論「シュタイナー教育思想の哲学的基盤(3)-フィヒテの自我論の受容と克服」『HABITUS』(第19巻、2016年)を参照のこと。
2) Tb610, S.254-255 邦 訳248頁。In: Hegel,G.W.F., Vorlesungen über Nturephilosophie, Michelet,C.L. (Hrsg.) , Bd.7, Berlin 1847. A,2.Aufl.Zusartz zu §376, S.696f.
3) Hegel,G.W.F. Griecheische Philosophie.II. Plato bis Proklos. Teil 3. In: Pierre Garniron / Walter Jaeschke (Hrsg.), Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1996. (G.W.F.ヘーゲル『哲学史講義』第3部「ギリシア哲学II プラトンからプロクロスまで」P.ガルニロン・W.ヤシュケ編、フェリックス・マイナー出版、ハンブルク、1996年。山口誠一、伊藤功『ヘーゲル「新プラトン主義哲学」註解 新版『哲学史講義』より』知泉書館、2005年)
4) Tb623, S.15 邦 訳20頁。In: Hegel, G.W.F., Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie. Michelet,C.L.(Hrsg.), Werke,15. Bd3, Berlin 1844, S.95f.
5) Tb610, S.252-253 邦 訳246頁。In: §552 von Hegels《Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften》
6) Tb610, S.64. シュタイナーは、こうした思考は、さかのぼれば、すでに古代ギリシア哲学のなかに見いだすことができるとし、この精神を、哲学の歴史において初めて高度な完成の域に到達させた人物としてソクラテスの名をあげている(S.66)。邦訳650頁。
7) a.a.O., S.23 邦訳、29-30頁。
8) Tb623, S.18. 邦訳、23頁。
9) Tb610, S.238 邦訳、233頁。

The Philosophical Ground of Steiner's Educational Thought (4)

: Hegel's Epistemology Directed to the Acquisition of Freedom (Part 1)

Yoshinori ETO

Associate Professor, Hiroshima University

This study aims to clarify the structure of Hegel's epistemology as a foundation of Steiner's educational thought. This study is composed of four chapters as follows: 'The epistemological struggle of Steiner: Before Hegel'; 'Hegel as a Philosopher who accepts 'Goethe's Worldview' and understands the significance of the Greek Proverb, "Know thyself"'; 'Understanding Steiner on Hegel's Theory'; and 'The Difference between Steiner's and Hegel's thought'. The first two of these chapters will be printed in this issue, while the second two will be printed in the next issue. As a result of this study, two points concerning Steiner's view of Hegel's reputation become apparent. The first point is that Hegel adopts dynamic metamorphosis theory as Goethe does. The second point is that Hegel finds the perspective of 'metamorphosis' in 'thinking' as self-recognition—'know thyself'—which Goethe could not accept. Steiner appreciates Hegel as 'a Philosopher who has Goethe's worldview' and expresses 'the view of Metamorphosis' in his idea. This proverb of 'know thyself' (γνῶθι seαυτόν (gnothi seauton) refers to the inscription carved into the temple of Delphi. Steiner thinks that this ancient, divine message encourages us to disclose the mystery of the world through 'thinking'. In the next issue, the study considers and clarifies the aspects of Hegel's philosophy that Steiner considers to have philosophically systematized the proverb "know thyself".